

平成 26 年度・陸前高田市文化財報告会 発表用資料

- ・日時：平成 27 年 3 月 7 日(土) 13:00～
- ・場所：陸前高田市立定住促進センター(竹駒地区コミュニティセンター)

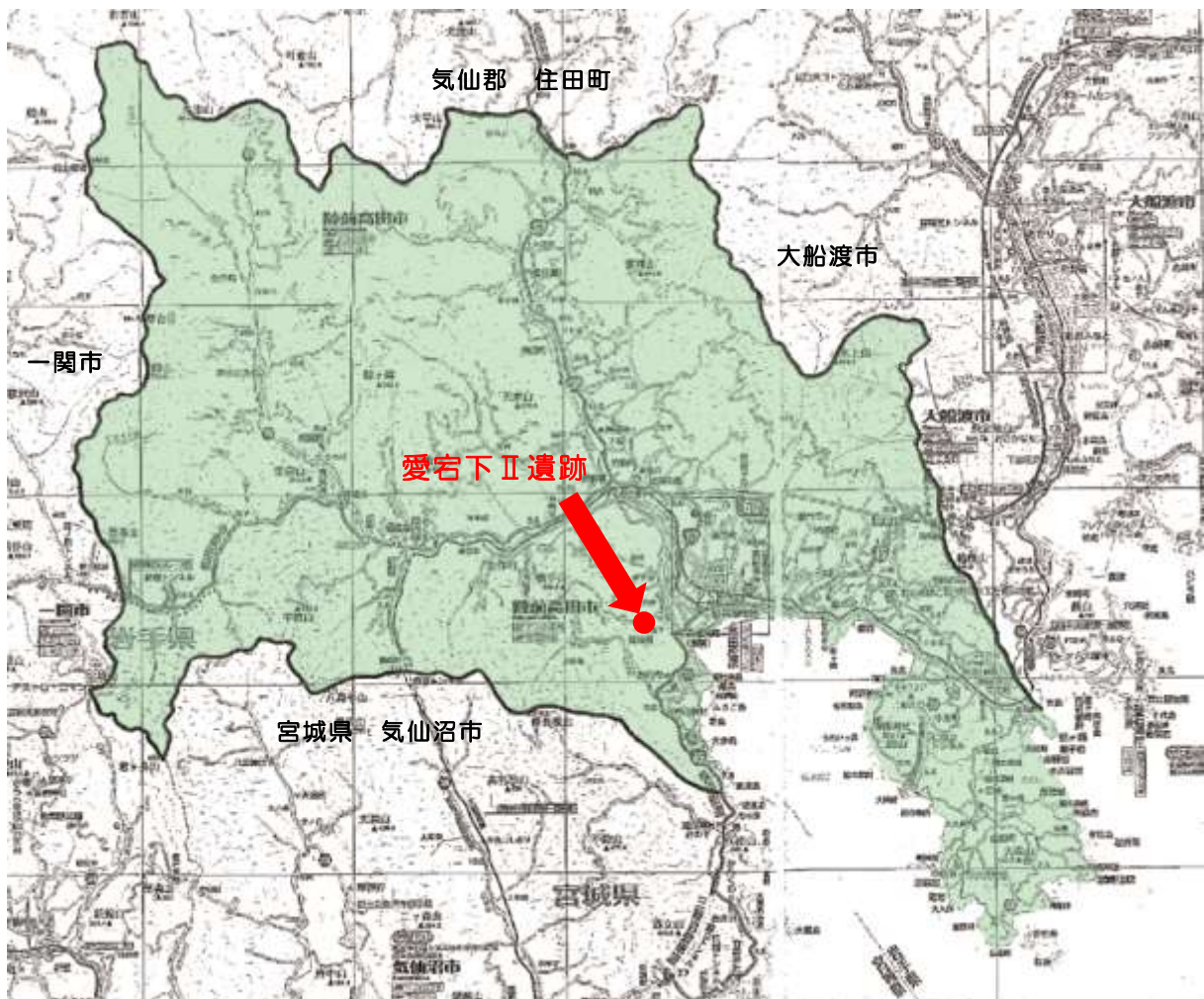
埋蔵文化財調査成果報告《 1 》・愛宕下Ⅱ遺跡(気仙町)

陸前高田市教育委員会生涯学習課
西岡 誠司(神戸市より派遣)

1. はじめに

愛宕下Ⅱ遺跡(あたごしたにいせき)は、陸前高田市気仙町字愛宕下に所在しています。

北上山地から広田湾に流れる気仙川の西岸に位置しており、標高約 18m～30mの東向きの斜面地に立地しています。現状は、植林による林地で、植林等によって、削られているところが見られます。



第 1 図：愛宕下遺跡位置図①



第2図
愛宕下Ⅱ遺跡
位置図②



写真1：愛宕下Ⅱ遺跡・遠景（東から）



写真 2：重機による掘削作業状況



写真 3：人力による掘削作業状況

今回の発掘調査は、三陸沿岸道路(唐桑高田道路)及び今泉地区土地区画整理事業に伴う調査で、事前の試掘調査結果に基づいて、埋蔵文化財が確認された約 1,470 m²を対象として、平成 26 年 4 月 8 日～10 月 15 日まで実施しました。

まず、表土から遺物包含層(土器や石器といった古い時代の遺物を含んだ地層)の上までは、重機を使って掘り下げていきます。その後、遺物包含層の掘り下げや遺構の確認・掘り下げ等は、人力によって行います。

調査の結果、平安時代の遺構面と、縄文時代～古墳時代の遺物が検出されています。

2. 遺跡の概要

・(1) 平安時代の遺構と遺物

現況地表面の約 0.5 m～1.0 m 下で、平安時代の遺構面が検出されました。

調査区南側では、地山面ではなく、整地した土層の上から、遺構が掘られている状況が確認されました。かなり大規模に斜面地を造成し、平坦な地形を作るために、削り取った地山の土を盛って、整地したと考えられます。

整地された遺構面の約 20 cm 上の地層において、灰白色火山灰が検出されました。火山灰の成分等を分析した結果、10 世紀初め頃に、十和田湖の火山が噴火した際に、降り注いだ火山灰(十和田 a 火山灰：とわだえいかざんばい)であることがわかりました。

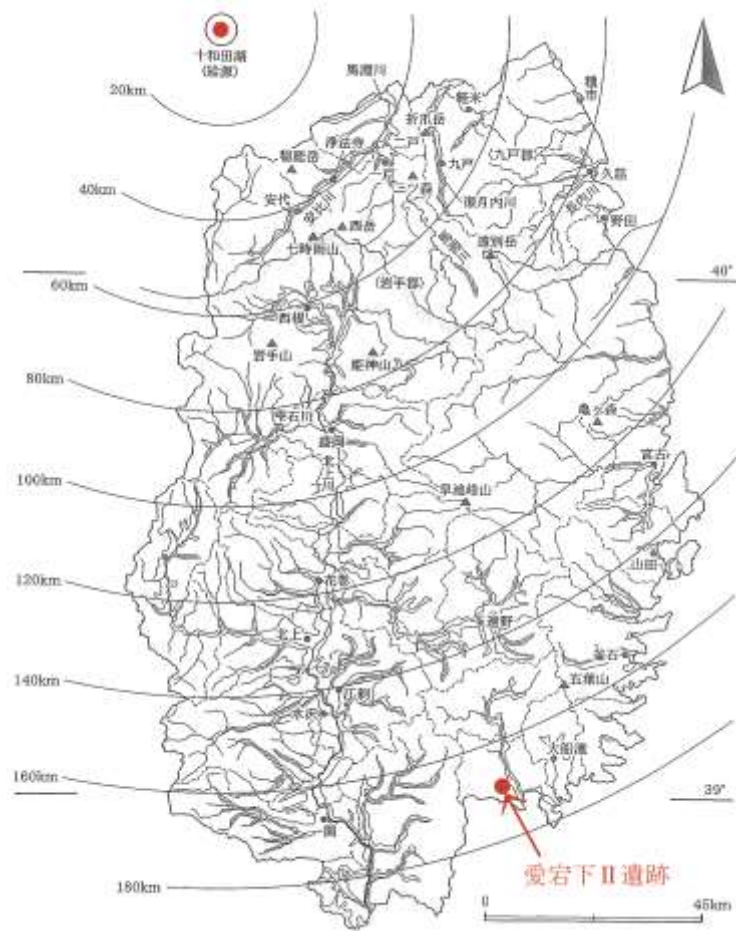
この年代については、『扶桑略記(ふそうりゃくき)』という文献史料の記述等に基づいて、延喜(えんぎ)15 年：(西暦 915 年)とする説が最も有力です。

十和田 a 火山灰は、調査区の中央付近で確認され、南北 6.0 m、東西×6.0 m の範囲に広がっており、2 cm～5 cm の厚さで堆積していました。

十和田湖から、愛宕下Ⅱ遺跡までは、直線距離で約 170 km 離れています。なお、十和田 a 火山灰は、南方約 300 km まで広がっており、東北地方一円に降り注いでいたことが確認されています。

平安時代の遺構面(第 1 遺構面)の時期は、この十和田 a 火山灰よりも、下層になるため、少し古い時代の 9 世紀末～10 世紀初頭と考えられます。

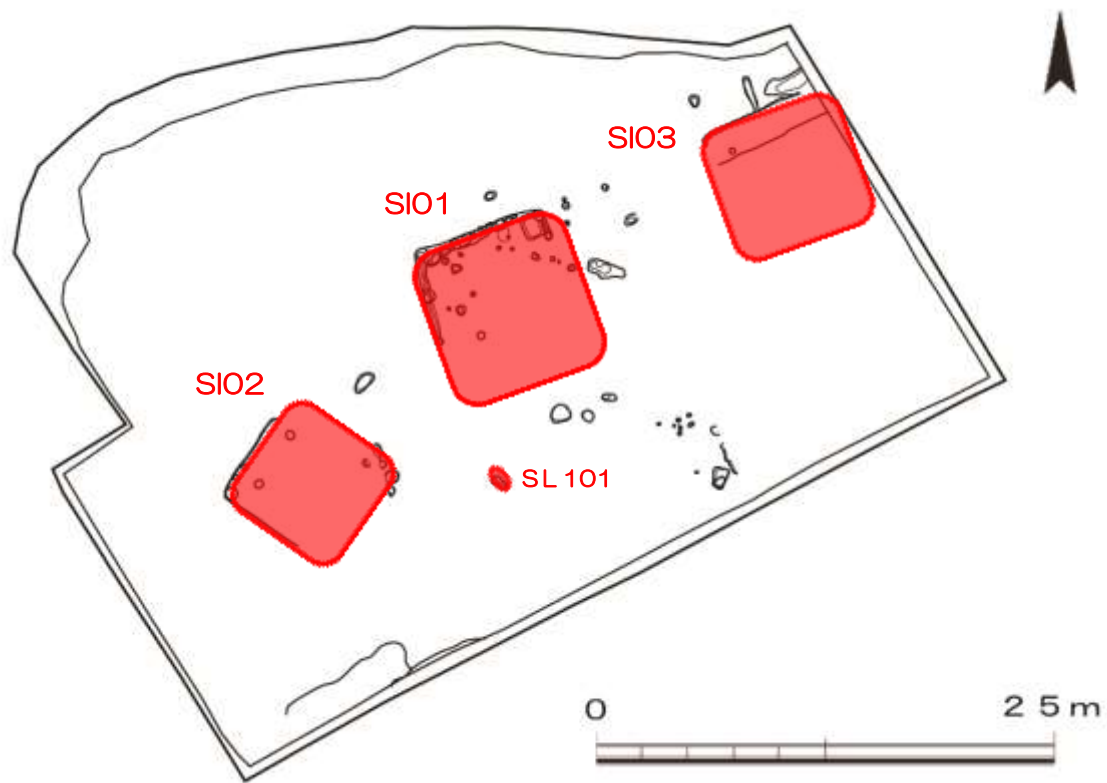
第 1 遺構面においては、平安時代の竪穴住居 3 棟、土坑 7 基、溝 1 条の他、多数の柱穴・ピット等が検出されています。



第3図：愛宕下Ⅱ遺跡と十和田湖の位置関係



写真4：十和田 a 火山灰・検出状況



第4図：第1遺構面・調査区平面図



写真5：第1遺構面全景（東から）

竪穴住居(SI01・SI02・SI03)は、いずれも丘陵の南斜面(標高約 20m～23m)に作られています。平面形は3棟とも隅丸方形で、南側は失われていました。

SI01 は、東西 7.5m×南北 5.5m以上、深さ 10cm～50cm で、一辺の規模が 7.5m程度であると推定されます。周溝内において柱穴が検出されましたが、床面で確認されなかったため、主柱穴に関しては、現在検討中です。



写真 6 : SI01 全景

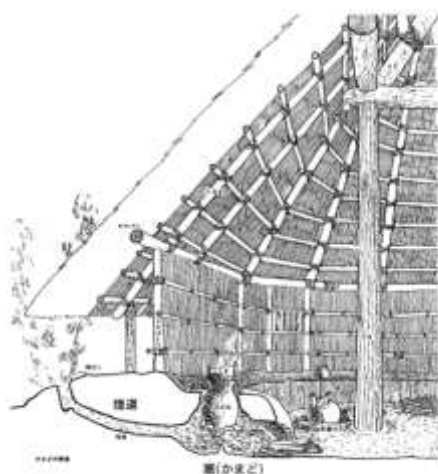


写真 7 : SI01 カマド検出状況

北壁の中央よりやや東側で、石組みのカマドが検出されました。

「カマド」とは、土や石等で造った煮炊きをするための施設で、通常は、竪穴住居の壁面に接して作られていることが多く、住居の内側には、火を焚いた場所である「焚口(たきぐち)」が見られ、住居の外側には、煙を排出するための「煙道(えんどう)」や「煙出し(けむりだし)」が作られます。カマドから北側に、煙道が 1.5m以上伸びており、煙出し部分は、赤く焼けていました。

SI01 では、床面付近や埋まった土の中から多くの土器や石器等が出土しています。



第 5 図 : カマドの構造(模式図)



写真 8 : 竪穴住居内のカマドの復元

『滋賀県・下羽田遺跡現地説明会資料』
より転載

『福島県文化財センター白河館・常設展示より』



写真 9 : SI01 出土・刻書土器

中でも、特筆すべきものとして、住居内の床面付近から、底部外面にヘラで文字を刻んだ土器「刻書土器(こくしょどき)」が 1 点出土しています。

刻まれた文字については、現在検討中ですが、「正月女? (むつきめ?)」である可能性が考えられます。また、カマド周辺で、土製支脚が 1 点出土しています。この土製支脚は、円筒状で中空の形状をしており、直径約 10cm で、上部は欠けていますが、現存高で約 18cm です。

土製支脚は、岩手県では、主として、9 世紀～10 世紀にかけて、沿岸部の久慈市・宮古市等に多く、北上川流域の盛岡市・水沢市等でも出土しています。また、製塩土器(海水から塩を作るための土器)とセットで出土することが多いことから、土器製塩に関する遺物として注目されています。

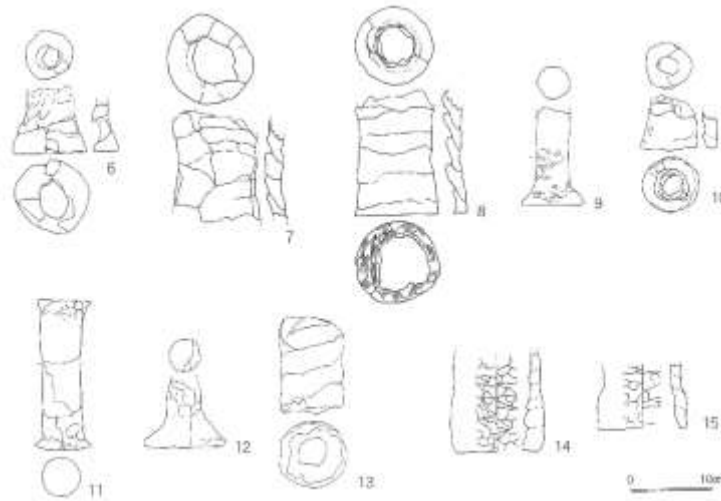


第 6 図：岩手県内の土製支脚が出土した遺跡

『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 X IX』より転載



写真 10 : SI01 出土・土製支脚



第7図：久慈市内出土の土製支脚『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XIX』より転載



写真 11：SI02 全景



写真 12：SI03 全景

SI02は、東西5.3m以上×南北5.1m以上、深さ5cm～30cmで、一辺の規模が6m程度であると推定されます。北壁の中央付近で、カマドが検出されましたが、焚口付近に焼土がわずかに残っていた程度で、袖や煙道部分は、後世のかく乱によって削られていました。南側は削平されているため、支柱穴は、北側の2本しか検出されませんでした。4本柱の竪穴住居であると推定されます。

SI03は、東西6.8m以上×南北2.5m以上、深さ5cm～50cmで、一辺の規模が7m程度であると推定されます。北壁の中央付近で、カマドが検出されました。焚口から北側に約2m、幅約25cm～40cmの煙道が伸びています。支柱穴は4本と推定されます。

出土遺物については、現在整理中のため、詳細は不明ですが、いずれの竪穴住居も、9世紀末～10世紀初頭頃に作られた可能性が高いと考えられます。

調査区の中央部南側において検出された焼土坑(SL101)は、南北85cm×東西45cm、深さ30cmで、南側が著しく焼けて赤変しており、埋土内から、炭や鉄滓(てっさい)が出土しています。鉄滓は、鉄製品を作る時にできる鉄クズで、第1遺構面や遺物包含層内からも多く出土していることから、集落内において、小規模な製鉄(小鍛冶：こかじ)が行われていたと考えられます。



写真 13：SL101 全景

また、遺物包含層から「ふいご」の羽口（はぐち）が数点出土しています。

「ふいご」とは、鉄やガラスを作る時に、炉の中に空気を送りこむための装置のことです。また、炉に差し込む送風管の先の部分を「羽口」と呼んでいます。つまり、ふいごの羽口と鉄滓が見つかることから、製鉄が行われたことがわかります。



写真 14：遺物包含層出土の「ふいご」の羽口



写真 15：愛宕下Ⅱ遺跡出土の鉄滓



写真 16：平安時代の鉄づくり『福島県文化財センター白河館・常設展示より』

・(2)縄文時代～古墳時代の遺構と遺物

第1遺構面から、地山面まで掘り下げて、精査を行いました。自然の落ち込みが確認されただけで、人為的な遺構が検出されなかったため、第2面については、「第2遺構面」ではなく、「第2面」と呼ぶこととしました。

第1遺構面検出中、及び第2面までの掘り下げの途中で、縄文時代～古墳時代の土器・石器等が出土しています。



写真17：第2面遠景(南東から)



写真18：第2面全景(東から)



写真19：調査地から気仙川を望む(西から)

出土遺物の中で注目されるものとして、続縄文時代の土器が1点出土しています。

本州で、弥生時代・古墳時代の生活が営まれていた頃、北海道には、鉄の道具は、伝わりましたが、稲作文化は伝わりませんでした。また、縄文時代と同じような漁撈(ぎょろう：魚貝類を採る)・狩猟(しゅりょう：鳥や獣の狩りをする)・採集(さいしゅう：食用になる草や木の実を採る)生活をしていました。

つまり、続縄文時代とは、北海道における時代の呼び方で、鉄の道具は伝わったけれども、縄文時代と同じような生活様式を続けていた時代といえるでしょう。

続縄文時代は、「恵山式：えさんしき」⇒「後北式：こうほくしき」⇒「北大式：ほくだいしき」の概ね3つの時期に分けられています。

後北式とは、「後期北海道薄手式土器」の略で、「北海道式薄手縄文土器群」の時期を、2つに分けた場合、前期の「隆起線を欠くもの」を「前北式」と呼び、後期の「隆起線のあるもの」を「後北式」と呼んでいます。

後北式は、「江別式」または「坊主山式」と呼ばれることもあります。

後北式(江別式)は、土器の形や文様によって、A・B・C・Dの4つのタイプに細分され、さらに、C式は、C1式とC2式に分けられます。注口土器の出現までが、C1式で、出現以降が、C2式としています。現在では、時期的には、C2式とD式が同じ時期と考えられており、C2-D式という呼び方をしていることが多いです。

分布範囲は、時期によって変化しますが、道央部(北海道の中央部付近)、石狩平野を中心に分布しています。

A式⇒B式⇒C1式⇒C2-D式へと分布範囲が拡大していきます。A式の頃には、石狩平野周辺のみでしたが、B式の頃には、北海道のほぼ全域に広がり、さらに、C1式の頃には、本州の青森県まで分布範囲が拡大していきます。最も拡大した後北C2-D式の頃には、北海道の全域と東北地方全域に広がり、北は、樺太半島や千島列島まで、南は、本州の新潟県や福島県で出土例が確認されています。

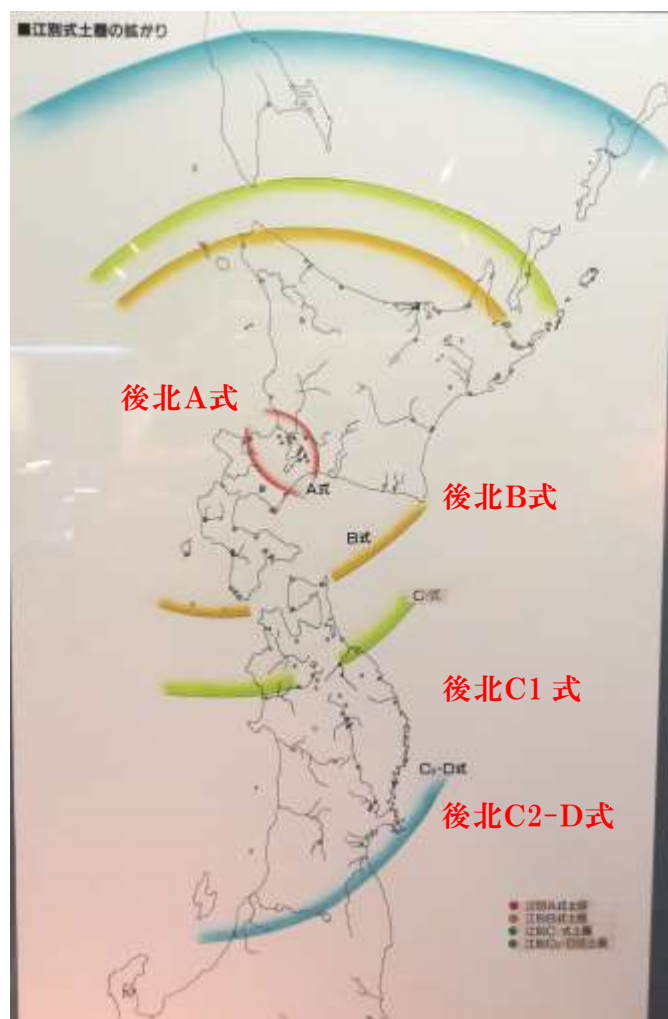
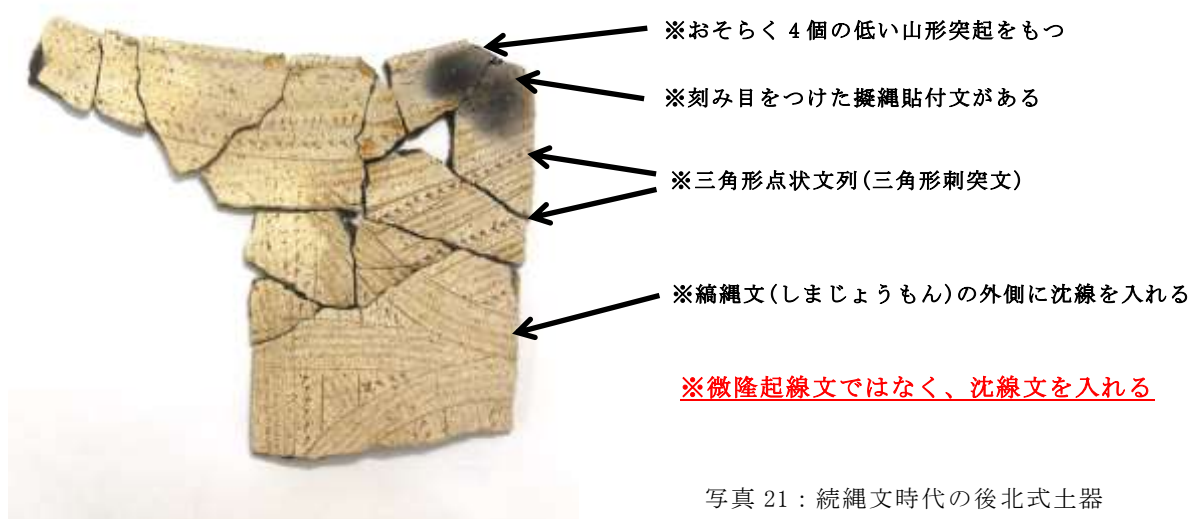


写真 20：後北式(江別式)土器の広がり『江別市郷土資料館常設展示パネルより』

今回出土した後北C2-D式の土器の特徴としては、次のとおりです。

- ①全体の器形としては、おそらく4個の山形突起をもつ深鉢(甕)と考えられます。
- ②口縁部とその少し下に、刻み目をつけた断面三角形の貼り付けの突帯(擬縄貼付文)を2条めぐらせています。
- ③「三角形点状文列(三角形刺突文)」と呼ばれている三角形の小さな刻みが点状に並ぶ文様が見られます。
- ④「縞縄文(しまじょうもん)」と呼ばれている、数条が単位となった縞状の縄文が見られます。縞縄文は、帯縄文という名称で呼ばれることもあります。
- ⑤通常は、縞縄文を区画するように、細い粘土紐を貼り付ける微隆起線文(びりゅうきせんもん)が見られますが、この土器については、それが沈線文で表現されています。
- ⑥土器の胎土が全般的に白っぽい色をしています。焼きが良くないためと考えられ、本来はもう少し茶色に近い色調であった可能性があります。



北海道江別市の江別市立郷土資料館では、江別市坊主山遺跡出土の江別式(後北式)の遺物をはじめ、江別市内の遺跡から出土した縄文時代から擦文時代にかけての土器や石器が展示されています。



第8図：江別市の位置



写真 22：江別市立郷土資料館・外観



写真 23：江別市立郷土資料館・展示風景



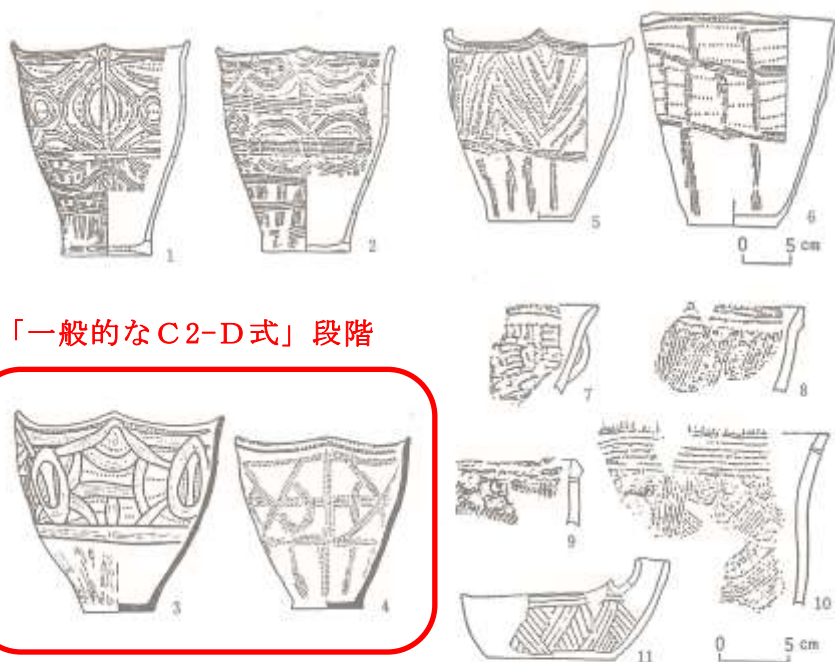
写真 24：江別市立郷土資料館・展示風景



写真 25：坊主山遺跡出土後北 C2-D 式



写真 26：後北 C2-D 式の注口土器



「一般的な C2-D 式」段階

第 9 図 後北 C₂-D の細分と細年（大沼 1982 より；縮尺不同）

(1) 1, 2 : C₂-D 式初, (2) 3, 4 : 一般的な C₂-D 式, (3) 5, 6 : C₂-D 式後葉, (4) 7-9 : C₂-D 式末, 10, 11 : 北大式

現在では、後北C2-D式は、さらに4つの時期に細分されており、古いものから順番に、「C2式初」⇒「一般的なC2-D式」⇒「C2-D式後葉」⇒「C2-D式末」という4つの段階に変遷していくと考えられています。

愛宕下Ⅱ遺跡出土の後北式土器は、第2段階の「一般的なC2-D式」に相当すると可能性が高いと考えられます。

現在では、後北式の次の時期にあたる「北大式」も含めると、東北地方における北海道系土器の出土例は、200例近くになると考えられています。

青森県や岩手県の内陸部、特に北上川流域に多く分布しています。また、宮城県をはじめ、秋田県、山形県、福島県、新潟県においても出土例が確認されています。

一方で、岩手県の沿岸部においては、出土例が少なく、沿岸南部においては、ほとんど見つかりません。



第10図：東北地方の北海道系土器の分布 『新金沼遺跡』より転載(一部改変)

また、遺物包含層から弥生時代末～古墳時代初頭頃と考えられる土器が出土しています。
この土器は、岩手県下閉伊郡岩泉町の赤穴洞穴(あかあなどうけつ)で出土した「赤穴式」の特徴が見られます。

赤穴式は、福島県白河市の天王山遺跡を中心として分布している「天王山式」系土器と同じ時期である可能性が考えられています。

いわゆる「交互刺突文(こうごしとつもん)」と呼ばれる口縁部の文様が特徴的です。



写真 21：愛宕下Ⅱ遺跡出土の赤穴式土器



写真 22：天王山遺跡出土の天王山式土器



第 11 図：天王山遺跡・位置図



写真 23：白河市歴史民俗資料館・外観

さらに、土器の他には、遺構内及び遺物包含層から石器が出土しています。
石鏃・石匙・スクレイパー・環状石斧の他、石皿や敲き石、磨り石、剥片等があります。
石鏃 15 点出土していますが、変わった形をした石鏃が 1 点あります。この石鏃は、いわゆる「アメリカ式石鏃」と呼ばれているもので、基部にえぐりを入れた形をしています。
アメリカの原住民が使用していた石鏃と形がよく似ているところから、アメリカ式石鏃と名付けられましたが、実際は、アメリカ式石鏃を使っていた人々の方が、アメリカの原住民よりも遥かに古い時代に暮らしていました。



写真 24 : 愛宕下Ⅱ遺跡出土・石鏃



写真 25 : アメリカ式石鏃



写真 26 : 石匙

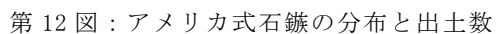


写真 27 : 環状石斧



写真 28 : スクレイパー

一方、岩手県においては、内陸部の北上川流域で多く見つかっていますが、沿岸南部では、ほとんど出土していません。



これらの出土遺物から見て、愛宕下Ⅱ遺跡の後北式土器と赤穴式土器は、ほぼ同じ時期である可能性が高いと考えられます。

実年代としては、3世紀末～4世紀初め頃である可能性が高いと考えられますが、今後の整理作業によって変わる可能性もあります。

年 代 AD	続縄文土器	弥生土器	土師器	参考 (畿内)
150		天王山式古段階		V様式
2世紀後半	後北C ₁ 式			
200		天王山式新段階		
3世紀前半				庄内式 (古段階)
250	「C ₂ 式初」段階			
3世紀後半	「一般的なC ₂ -D式」段階	終末期 (赤穴式など)	前塩釜式段階 (辻編年Ⅰ期)	庄内式 (新段階)
300				
4世紀前半			塩釜式古段階 (辻編年Ⅱ期)	布留式 (古段階)
350	「C ₂ -D式後葉」段階			
4世紀後半	「C ₂ -D式末」段階		塩釜式新段階 (辻編年Ⅲ期)	布留式 (中段階)
400				
5世紀前半	北大Ⅰ式		南小泉式	布留式 (新段階)

3. まとめ～今回の発掘調査で何がわかったのか。～

①谷状地形で、集落が立地することが少ないと想定される場所において、平安時代の住居跡が確認された。

⇒通常は、平地や丘陵上に立地するが多い。

②当地域の平安時代の集落のあり方を示していると考えられる。

⇒周辺に住居跡等の遺構が広がっていない。また、周辺から遺物の出土もない。

⇒数棟単位でまとまっており、小規模な製鉄や製塩を行っていた可能性がある。

③北海道や東北地方南部(福島県)等の他地域と広く交流していた可能性が高い。

⇒後北式土器・赤穴式土器・アメリカ式石鏃等が出土している。

④古墳時代・平安時代ともに、比較的、短期間で他の場所へ移動した可能性が高い。

⇒土器・石器等の出土遺物の量が比較的少ない。時期も4世紀と9世紀末頃に限定できる可能性が考えられる。